

第9部門（社会・文化土壌学）

社会・文化土壌学部門は、社会・教育部会と文化土壌学部会の2つの部会から構成されています。

社会・教育部会は、土壌が社会や生命の基盤であることの社会的認識を広め、深めることを目的とし、土壌の科学的・文化的・歴史的な知識および理解に関連する教育内容と学びの場での取り扱い、学習者の感受や理解の仕方について研究し、土壌への理解を促すための教材や教育方法を開発する部会です。

土壌の様々な機能が自らの生命や生態系を支えていることは明白であり、持続可能な社会の発展のためには、土壌を深く理解し、関連する事象を評価し、どのように対応すべきかを判断して適切に行動する能力が、年齢、性別、その他様々なバックグラウンドを問わず広く求められます。その実現に向けて、土壌の性質・機能・役割といった必要な知識や概念を整理するとともに、学校教育や社会教育の場を対象に、学習者側の観点を重視した教材および教育方法を開発します。さらに、これらの研究成果を、長年の実績ある土壌教育活動に還元するとともに、活動を通して開発教材を評価し、改善を図り、学会内外で情報共有することで研究のさらなる発展を図ります。

関連する活動として、1999年に『土をどう教えるか—新たな環境教育教材』（古今書院）を刊行し、2009年には学校教育を強く意識して内容の充実化をはかり『新版 土をどう教えるか—現場で役立つ環境教育教材—』上・下2巻（古今書院）へと改訂しました。同年より学会の全国大会期間中に「高校生による研究発表会」を継続的に開催し、2014年より土壌教育委員会 Web サイトにおいてウェブ版の各種教材を公開しています。2020年には「Soil Sciences Education: Global Concepts and Teaching」を発行、2021年には「土壌教育の国際ガイドライン」を提案し、近年では土壌モノリス展の開催、土壌教育関連のシンポジウムの開催といった研究成果の社会還元や情報公開にも取り組んでいます。詳しくは土壌教育委員会の Web サイト（<https://jssspn.jp/edu/>）をご参照ください。

文化土壌学部会は、人間が自然との関わりや風土のなかで育んできた生活様式、価値観、言語、技術、学問、芸術、宗教などを文化と捉え、土壌との結びつきを研究する部会です。歴史、経済、哲学などの多様な視野から研究・評価・提言を行い、土壌・肥料・植物栄養学の発展や土壌に対する倫理観の醸成、ひいては人々が健康で心豊かに暮らすことのできる持続可能な社会の形成に寄与することを目的とします。土壌そのものを分析することで過去の人間活動の諸相を考察する研究や、「土壌・肥料・植物栄養に関する人間の認識・実践」とその歴史、多様性、将来の可能性を探求する研究を含みます。

持続可能な社会の形成は、科学技術の発展だけでは不可能であり、人々の意識と行動の変容が必要です。将来的な土壌との関わり方を考える材料は、人間の過去や異文化の中に

隠れています。例えば、農業生産力の向上に大きく貢献してきたリン肥料について、鉍物資源の有限性や環境への影響が問題視されており、農業を含めた社会システムに対する多面的評価が求められています。そこで、生物地球化学的なリンの循環、植物やヒトの体内におけるリンの挙動を踏まえながら、近代農業を支えたリン鉍石の功罪、糞尿などの農業利用や有機循環思想の歴史に焦点を当て、人間がいかにしてリンと関わってきたかを論じました。その内容は、日本土壌肥料学会編『文化土壌学からみたリンの姿』（博友社 2010）に示しました。

グローバル化する現代社会では、様々な国や地域で生まれた概念が世界に波及し、従来とは異なる土壌の見方を提起します。その一例として、土壌保全の必要性をどのような理路で正当化するかという「土壌倫理」の問題が挙げられます。この問題に対し本部会では、多分野の研究者や市民団体、行政が連携して行う超学際研究の有効性、リスク論と法制度、世代間倫理、社会運動の観点から検討を行いました。こうした土壌をとりまく諸概念について整理するとともに、それらを日本の風土や文化に親和するものとして再構築する試みにも取り組んでいきます。